愛・信・恕

第54回大阪大学卒業証書授与式 山村雄一総長式辞（昭和58年3月25日）

諸君、卒業おめでとう。

長い間の学生生活を終えて、かずかずの思い出とともに、大学を後にし、今や実社会に巣立ってゆく諸君は、感慨無量という人もあるだろうし、希望に胸ふくらませている人、逆に前途に不安を持つ人、種々さまざまな思いを胸に秘めていることと思います。

その卒業のはなむけに、私は「愛・信・恕（じょ）」という言葉を送りたいと思います。この言葉は人間関係についての自作の座右銘、自らに対する戒めの言葉であります。

大学を出て一般社会で生きてゆくとき、人間関係ほど大切なものはありません。友人、恋人、父母、兄弟姉妹、仕事仲間、先輩と後輩、師匠と弟子、私達の一生はよきにつけ悪しきにつけ、数多くの人達との人間関係のなかに経過してゆくもので、人間関係の重要さは今更強調する必要のないことだと思います。

だが、人間関係が大切であることがわかっても、すぐれた人間関係をどのようにして築き上げ、これをいかにして維持してゆくか、千差万別の多彩な背景をもっている人間どうしの間に、しっかりした人間関係をうちたてる為にはどうすればよいか、私の自らの体験にもとづいて次の三つのことをあげたいのです。

まず「愛」であります。釈迦もキリストもモハメットも宗教の基本として愛を説いています。それは人間として生きてゆく上で最も大切であるからでしょうが、また容易なものでもないことによっているのでしょう。人間関係もまず愛から出発します。例えば教官が学生に、医師がその患者に接するとき、そのひとりひとりに真底からの愛情をもっているかと問われると、人間には好き嫌いもあることで、自信のない答が返ってくるかも知れません。しかし愛のない教官と教え子との間、医師と患者との間には真の意味での人間関係は成立せず、医師となり教授となった甲斐はなくなることでしょう。友人どうしの間また然り、親子の間もまたそうです。まず第一に「愛すること」をあげます。

ところで真の愛情ということをつきつめていくと、その背景に「信じること」、静かで山のような「信」がなくてはならないことに気づきます。砂漠の太陽にも似た燃えるような恋も、色あせてみれば動物的感情のみが残っていたということがありますが、愛に信が伴わなかった為でしょう。信じてこそ人間関係は確固としたものになり永続するのです。「愛する為には信じる」ことです。

だが信じるということも、言うことはやさしいが実行はむずかしい。長い人間関係の経過のなかでは、人は信と不信との明暗の境を歩むことが多い。信じあっている者どうしの間でも突風のように不信の念が発生することもあります。また個人の思想・信条・発想や判断のしかたなどが個々別々で相異なっていることは当然ですが、そのため親友の間といえども意見がはげしく対立する場合があります。そんなとき人はしばしば不信と結びつけてしまうというあやまちを犯すものです。

このような人間関係のなかで、人が人を信じる為には恕（ゆる）す心がなくてはならないと思います。「信じるためには恕す」ことです。

しかし恕すこともむずかしい。人によっては最もむずかしいことであるというかも知れない。それができれば何もかも問題ではないというかも知れません。

考え方によっては最もむずかしい「恕す」ということを可能にするものは何か。それは最初にもどって、「愛」であります。愛するということがはじめにあれば人を恕すことができるのです。「恕すためには愛する」ことです。

人と人との出会いはある日突然におこります。そしてその後の生涯にわたって変わらぬ人間関係を維持していく為には、愛することからはじめ、愛するために信じ、信じるために恕し、恕すために原点に立ちかえって愛することです。そしてこの愛・信・恕の順序をあやまらないことも大切です。信じることからはじめると、迷信におちいることがあり、恕すことからはじめると無軌道、無原則になるおそれがあります。愛すること、信じること、恕すこと、この順序であります。

諸君のこれからの数多くの豊かですばらしい人間関係を祈ります。

以上をもって式辞とします。